十一月の人形浄瑠璃

文楽座

十一月の人形淨瑠璃

——太夫・三味線・人形總出演——

（晝の部）

壞景清八島日記

花菱屋の段
日向島の段

女釣

嶋澤道八作曲
樣茂都陸平振附
新曲

傾城阿波の鳴戸

十郎兵衛住家の段

★二十日より晝夜の狂言入替上演致します★

（夜の部）

曲輪婦

吉田屋の段

夕ぎり
伊左衛門

菅原傳授手習鑑

杖折檻より
相丞名殘りの段迄

新板歌祭文

お染
久松

野崎村の段

昭和十九年十一月十日初日
（二十八日迄）
初日晝十一時・夜四時二部
毎日晝十二時・夜五時開演

●一部料金●

一等席　五圓
二等席　二圓四十錢
三等席　八十錢
（各等入場稅共）

一等御座席
一等椅子席は五日前より
前賣切符發賣致し居ります

前賣切符專用電話
南㊱四七一一番

一般御用の電話
南㊱三〇三二番
三七八八番

畫の部

孃景清八島日記

花菱屋の段

花菱屋女房　吉田小兵吉
花菱屋長　吉田玉市
娘糸瀧　吉田榮三郎
肝入佐次太夫　吉田玉德
遊女君　吉田常次
下女　吉田龜夫
飯焚男　吉田駒三郎
仲居　吉田玉米

竹本相生太夫
野澤吉五郎
豐竹呂太夫
鶴澤友衛門

日向島の段

切　竹本大隅太夫
鶴澤清八

悪七兵衛景清　吉田玉助
娘糸瀧　吉田榮三郎
肝入佐次太夫　吉田玉德
花野四郎　桐竹紋太郎
土屋軍内　吉田兵次
船頭　大ぜい

孃景清八島日記

花菱屋の段より日向島の段迄

この狂言名題は俗に「盲景清」と稱され明和元年十月豐竹座に書卸されました。若竹笛躬、黒蔵主、中村阿契の合作になるものがこの「孃景清八島日記」であります。近松門左衛門の血統をひく操浮瑠璃で、序は清水より大佛供養、二段目は武蔵守知章監物太郎館、三段目は手越の宿より日向島。今日舞台に上るのは始んどこの三段目のみであります。

大磯鞋坂手越の宿の遊女屋花菱屋の長の許へ、肝入佐次太夫に連れられて身賣に來た二七あまりの乙女がありました。聞けば母には死別れ、盲目の父は遠い日向島に非人暮し、この父を官に登せて孝養をつくしたい爲に金子が入用とあるので、長は同情してその金子を與へ佐次太夫をつけてはるばる日向島へむけて發足させます。この乙女こそ景清の娘糸瀧だつたのであります。

景清は東大寺大佛供養に入り込んで平家一門の爲に頼朝に一太刀報ひんとしましたが、重忠に裏をかかれて果さず、頼朝の仁心に感じ我と我が両眼をくり抜いて日向島へ下りました。娘の糸瀧がはるばると尋れて來ても頑な景清は父子の名乘もせず、人知れず聽丸の寶刀を渡して鎌倉へ追ひ歸しました。跡に娘が身を賣つて父を官に登せやうと置いて行つた金子を見ては流石に感涙にむせんで船を呼び戻さうとしますが、もう帆影は遙か沖合に消えてしまひました。景清の今までのひがみにひがみ、すれた邪心が和がずにはおられませんでした。放埒な振舞をつくした平家が三寶に見捨てられて亡びるのは當然であると……景清は遂に頼朝に對する敵意を飜然と改め迎への人達と共に目出度く鎌倉へ歸るのでした。

釣女

太郎冠者（竹本相生太夫　豊竹呂太夫）
美女　豊竹宮太夫
醜女（竹本南部太夫　竹本伊達太夫）
大名　竹本重太夫
鶴澤清二郎
野澤吉三郎
野澤錦糸
豊澤新三郎
鶴澤寛弘
（豊澤廣助　豊澤仙糸）

大名　吉田玉助
太郎冠者　吉田光造
美女　桐竹紋司
醜女　桐竹紋十郎

鶴澤道八作曲
楳茂都陸平振附

新曲　釣女

狂言の「釣女」を原本として河竹默阿彌が作つた既に常磐津に於て人口に膾炙されてゐるものでございます。筋は大名と太郎冠者が未だ定まる妻がない故、現福者と聞き及ぶ西の宮の恵比壽三郎殿に妻を申受けたいと祈念をこめますが、夢にお告がありまして釣竿を授り各々妻を釣り上げてかつぎを取つて對面しまして大名は美しい上臈、太郎冠者は世にも醜い醜女を授りますので太郎冠者は上臈の手をとつて走り去つて行くといふ諧謔味横溢の一篇でございます。

傾城阿波の鳴戸

十郎兵衛住家の段

大近松の「夕霧阿波の鳴戸」を飜案して近松半二、竹本三郎兵衛。吉田兵藏等の合作になる本曲は全十册よりなり、明和五年六月一日（二四二八）初日で竹本座に上場されたその第八册目がこの十郎兵衛住家の段（順禮歌の段）であります。

傾城阿波の鳴戸

十郎兵衛住家の段

竹本南部太夫
前 鶴澤寛治郎
竹本伊達太夫
野澤喜左衛門

後 竹本七五三太夫
鶴澤綱造

女房お弓　桐竹紋十郎
娘おつる　桐竹紋司
十郎兵衛　桐竹亀松
取巻大ぜい

阿波の十郎兵衛は阿波侯に仕へてゐた武士であつたが、舊主櫻井主膳が主家より預つてゐた名劍國次の刀を何者にか盜まれたので、その詮議の爲めに浪人となり、大阪の町端れ玉造に身を隱し、銀十郎と名を替へて、今では盜賊の群に入つて刀の行方を探してゐた。或る日、武太六と云ふ惡者が訪れて來て、十郎兵衛の引受けた金の催促をするので、女房お弓は色々と歎願したが承知しない。十郎兵衛も日暮れまでは今日の中と二人連れ立つて出掛けて行つた。入れ違ひに飛脚が來て投げ込んだ一通は、同類に吟味がかゝつたので寸時も早く立退けとの仲間からの知らせであつた。その時順禮歌を唱うて來る聲が聞えるので、お弓は施しをしようと門口に立出て巡禮の少女を呼び入れその身の上を聞いてみると、何と自分等が國に殘して來た娘おつるではないか。知らぬ娘は今日までの悲しい物語をするのだつた。お弓は我が子にまで罪を着せればならぬ破目を恐れて、實情も明さず涙ながらに路金を與へて故郷へ歸る樣にとすゝめるのだつた。子供は名殘り惜しげに去つて行く。

その日の夕暮れ時だつた。十郎兵衛は前の順禮を伴つて歸つて來た。順禮は十郎兵衛の尋ねるまゝ正直に「金は小判を澤山に持つてゐる」と云ふので、十郎兵衛はその金を暫らく借して呉れと頼むのであつた。順禮は恐れて大聲を上げた。近所へ聞えては大變と、慌てゝ順禮の口に手を當てた。十郎兵衛がフト氣が付いてみると無慘にも順禮は氣を失つてゐた。驚いて介抱したが既に絶命してゐた。

所へ女房お弓が歸つて來て、今日國元から順禮姿の娘おつるが不思議にこゝへ訪れて來た事を物語つた。十郎兵衛は娘の着てゐた着物の柄をきき、さては今殺したのは娘だつた事を知り、總てをお弓に話した。お弓は娘の死骸を抱きかゝへて號泣するのだつた。

折柄捕手が押し寄せて來た。二人は我が家に火を放ち、娘の死骸を手づから火葬に附して遁れて行く。

夜の部

曲輪　ぶんしょう　ぶんしょう

吉田屋の段

夕ぎり（竹本南部太夫　竹本伊達太夫）
伊左衛門（竹本雛太夫　竹本濱太夫）
喜左衛門　豊竹富太夫
おきさ　豊竹司太夫
太皷持　豊竹松島太夫
ツレ　鶴澤友平（鶴澤寛治郎　野澤喜左衛門）

藤屋　伊左衛門　桐竹亀松
吉田屋　喜左衛門　吉田玉市
扇屋　夕ぎり　吉田榮三郎
女房　おきさ　桐竹紋太郎
仲居　吉田常次
禿　桐竹小紋
太皷持　吉田駒三郎
若い者　大ぜい

夕ぎり
伊左衛門

曲輪　くるわ　ぶんしょう　ぶんしょう

吉田屋の段

大近松作の所謂夕霧物として數種ある中で最も完成したものとして名高い「夕霧阿波の鳴戸」三卷の上の卷吉田屋はこれ以後の夕霧劇の權威となり、改作物も種々出ましたが、その中でも原作の面影を多分に殘してゐる著作年代不明の「廓文章」があり（聲曲類纂補遺に安永九年作＝二四四〇＝と見えてゐる）、これが操芝居にかけられたのが寛政六年五月廿八日（二四五四）からの道頓堀大西芝居で、この興行の時から外題も今日の如く書かれたのでありました。

時は延寶師走の末の事、冬編笠も垢張つて、紙衣の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草、見すぼらしい姿を見せたは藤屋伊左衛門です。伊左衛門は吉田屋の内を視いて、喜左衛門宿にか……と聲をかけますが、なりに似合はぬ横柄な言葉に怒つた若い者は、高箒を持つてうちすへやうとしますが、折柄出て來た喜左衛門は是を止め、伊左衛門を奥へと招じ入れます。伊左衛門は、今に變らぬ吉田屋夫婦の志を喜びつゝも、今に夕とも霧とも噂をせぬを、若しや夕霧は無常の露と消へたのではあるまいかと案じますと、霧樣は病中ながら爰へ來て、隣座敷で阿波の客に逢つてゐるとの事てした。伊左衛門が怒つて悶へ泣く、所へ病に惱み戀に泣く夕霧が來て、煩ふて病に死ぬ身てあつたとかき口説きます。伊左衛門は萬歳傾城と夕霧を罵りますが、聽ては其眞情も分り解けるのでした。と、此時大勢の手で金箱が運ばれて來ますが、これぞ藤屋の親許で勘當を許し、夕霧の身代八百兩を送つてよこしたのでした。

菅原傳授手習鑑

杖折檻の段

竹本雛太夫
豊澤廣助
竹本濱太夫
豊澤仙糸

伯母覺壽　吉田文五郎
立田の前　桐竹龜松
宿禰太郎　吉田玉助
苅屋姫　桐竹紋司
土師兵衛　吉田小兵吉

東天紅の段

竹本住太夫
鶴澤重造
宿禰太郎　吉田玉助
土師兵衛　吉田小兵吉
立田の前　桐竹龜松

菅原傳授手習鑑

杖折檻の段より相丞名殘の段迄

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作で、當時竹本座の衰運挽回のために作者達は天滿宮へ祈願を籠め必死の覺悟で各自分擔書卸したのがこの淨瑠璃で果然好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にした因緣深い狂言であります。殊にこの淨瑠璃に於て興味を覺ゆるのは「骨肉の別れ」といふ同じ題目の下に各持場を定めて筆を執つた即ち「道明寺(相丞名殘りの段)」は松洛「佐太村(櫻丸切腹の段)」は千柳「寺子屋(松王首實檢の段)」は出雲と三人の作者が腕比べをした逸話が胎されております此度は「相丞名殘りの段」を特に紋下古靱太夫が相勤めまして大方の御期待に副ふことになつております。

(床本)　相丞名殘りの段

(前略)仰は荒木の天神河内の土師村道明寺に殘る威德ぞあり難き輝國四方を打眺め思はざる義にひまを取夜も明はなれ候へば御立ぞふと申にぞ又改る暇乞伯母が寸志の餞別せん用意の物こなたへと苅屋姫の上着の小袖かけたる伏籠諸共に御傍近く取直させ涙風荒き榻枕餘寒をしのがせ申さん爲伯母が心だきしめた小袖を島迄召さるゝ樣に輝國の御世話ながら賴まするとありければ是は宜敷進ぜ物笘の香防ぐとめ木の小袖家來に持せ參らんと立寄伏籠に手をかくる相丞暫しと止め給ひ御恩を厚く込給ふ伏籠にかけし此小袖中なる香はきかれ共名は大方伏屋の苅屋伯母御前より道實が申請し女子の小袖我身にはあはぬ笘身巾もせばき罪人が此儘にお預け申す我子袖と思召立田の前が追善の佛事も供にと伯母御前の心をさとる御詞骨身にこたへ忍び兼思はづわつと聲立て歎に扨はと輝國も心をかんじしほれ入覺壽の心は伏籠の內泣たは結句あの子が爲別れに一寸只一目伯母が願ひを叶へてと立寄袖を引とどめ御年故の空耳か今鳴たは、

相丞名殘りの段

切 豊竹古靱太夫
鶴澤清六

伯母覺壽　吉田文五郎
菅相丞　吉田榮三
贋迎ひ　吉田玉德
土師兵衛　吉田小兵吉
宿禰太郎　吉田玉助
奴宅内　吉田榮三郎
判官代輝國　吉田光造
丸屋姫桐竹紋司
こし元　大ぜい
仕丁　大ぜい
水奴　大ぜい

たしかに鶏あの聲は子鳥の音子鳥が鳴ば親鳥も鳴は生有ならひぞと心の歎きを隱し寄り鳴ばこそ別れを急げ鳥の音の聞へぬ里のあかつきもがなと詠じ捨名殘はつきずおいとまと立出給ふ御詠歌より此里に鶏なく羽たゝきもせぬ世の中や伏籠の中をもれ出る姫の思ひは羽ぬけ鳥前後左右をかこまれて父はもとより籠の鳥雲井のむかし忍ばるゝ

さすらへの身の御なげき夜は明ぬれぞ心の闇路てらすは法の御ちかひ道あきらけき寺の名も道明寺とて今も猶榮へまします御神の生るが如き御すがた處に殘れる物語つきぬ思ひにせきかぬる涙の玉の木槵樹珠數のかづ〳〵くりかへしなげきの聲に只一目見返り給ふ御顔ばせ是ぞ此世の別とはしらで別るゝ別れなり。

新板歌祭文

野崎村の段

切
竹本相生太夫
豐澤吉五郎
竹呂太夫
鶴澤友衛門

ツレ
鶴澤友松
豐澤仙松

娘お光　吉田光造
娘お染　桐竹紋司
下女およし　吉田龜夫
親久作　吉田玉助
丁稚久松　吉田玉枝
母お勝　吉田小兵吉
船頭竹松　吉田兵次
駕かき大ぜい

お染久松 新板歌祭文

野崎村の段

寶永五年正月（一六八八）のお染久松の情死事件に材を執り安永九年九月（一四四〇）大阪竹本座に近松半二作のこの「新版歌祭文」が上演された。これは座敷社の段、野崎村の段、長町の段、油屋の段の全二卷四段よりなり、殊に野崎村の段が有名である。

娘お光は氣もいそ〳〵、勝手から俎板や庖丁を持出して、祝宵の用意の膾大根をちよき〳〵と刻み出した。

と、久松の跡を慕ふて堤傳ひ、下女およしを連れて來た油屋の娘お染が、船の上り場で敬へられた梅を目當てに久作の家を探し當て〻訪れる。

お染の聲を聞くと、思ひ當る節のあるお光、最うもや〳〵と胸は搔き亂れ、何ぢや、久松さんに逢はせて呉れ、そんなお方はこちや知らぬ、と膠もない腹立ち聲。其の樣子がお染は腑に落ちず、ふと思ひ付いて土產代りに帛紗包みの香箱を差出すと、こりや何ぢやえ、大所の御寮人樣、樣樣々と云はれても、心が至らぬ措かしやんせ、在所の女子と侮つてか、欲しくはお前に遣るわいなあと、お光は香箱投げ付け、門びつしやり、其處へ久松連れて出る久作、久松に肩を揉ませお光には炙を點えさせるが、お染の門に居るのを氣付いた久松の、折が悪

戰果に應へて大增産へ！

今こそ一億

驕敵へ總追擊!!

いと目顏で止めるのが、お光には又妬ましくて靜ひを初め、夢中になつた揚句は、久作の頭へ炙を點える始末、其れを久作が仲裁して、仲直しが直に取結びの盃、髮も結ふたり鐵漿も付けたり湯も使ふて花嫁御、作つて置けと打笑ひ、お光を連れて納戸へ入る。其間遲しとお染は駈入り、山家屋へ嫁入せいとは胴慾ぢや、其方は思切る氣でも、わしや何ほでも得切られぬ、と久松が殘して來た文を突付け搔口說き用意の剃刀で自害しやうとするので、久松も所詮は深い惡緣と思ひ、お染の手を執つて泣き悲しむ。始終を立聽いた久作が出て、久松は實の子で無く、二本差す家柄に生れたのを、妹が乳母で有つた關係から引取つて養つた事から、智慧付けの爲に油屋へ丁稚奉公に出した事を語り、親方の恩も義理も辨へず、嫁入の極まつたお主の娘を唆かす久松を責め、又、お夏清十郎の音語りに擬え、二人の不心得を懇ろに誡め、理を盡して別れる樣に合點させると、只聞き入れたとの返辭を喜んで、お光を呼出し、祝言させよと綿帽子を脫れば、島田髷が根元から切つてあつた。事の意外に皆が驚くのをお光は押えて、お二人が思ひ切つたと云ふは表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟と知た故、何うぞお命取止めたさ、わしや最ううんと思ひ切つた。さあ、切つて祝うた髮容……と兩肌脫げば、下着は白無垢、首には五條袈裟をかけて居る。

玉より淸き眞心に、今更ら何と言葉さへ、久松お染が面目なさに、自害しやうとするを久作は止め、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出來したと云ふ心の中、思ひやりが有るなれば、何故存らへては下さらぬ……と二人を諌めて合點させ、嘸ぞ母御樣が案じてござらう、大事な娘御、誰か確な者に送らせ度いものぢやと、久作が案ずる折、樣子を殘らず表で立聽き、油屋の後家お勝が入つて來た。久作の親切、お光の志を心で拜んで居たお勝は、二人に禮を述べ、世上の補ひ心の遠慮から、駕で堤を大阪へ戻る久松とは別れ〳〵に、お染を連れて、船で戻る事にする。

文樂座小史（昭和十九年三月調査）

○竹本座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）

○文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪ヘ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

昭和十九年十一月八日印刷
昭和十九年十一月十日發行
發行所 松竹株式會社大阪支店・發行者 鳥江鎮也・印刷所 ミカド印刷合資會社
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店内
大阪市東區和泉町一丁目一二
一部金十五錢

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆樣御承知の通り我大阪に於ける鄕土藝術、三位一体の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でございます

文樂座人形淨瑠璃は 皆に大阪の誇りとする舞台藝術のみならず我日本に於ける古典舞台藝術の至寶として世界に誇るべきものであります、從つて開演毎にこの大使命が全う出來ますやう、皆樣の御期待に背かぬ樣、皆樣に御滿足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの点は御客樣の御聲として承りたく存じ上ます。

貴重品は 各自にお持ち下さいませ、お場席をお立ちの時は御携帶を願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひを致します。お席では御遠慮下さいませ。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ゐます。

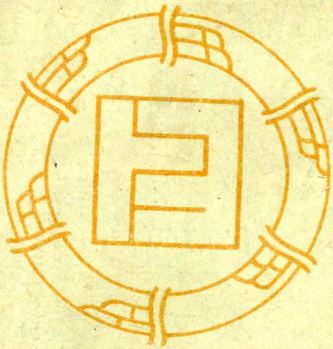
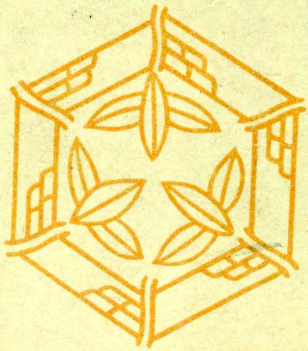
賣店は 一階西側休憩所に御座ゐます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ゐます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお斷り申上ます。

御休憩の間は 二階西側に大休憩所の設備が御座ゐます。御辨當御持參の御方樣は何卒御利用下さいませ。

出演者 病氣其他の事故にて出場不能の場合は乍勝手代役にて相勤めますれば右豫め御諒承を願上ます。

★お客樣へ特にお願申上ます
物資不足の折柄、洵に恐れ入りますがお下駄履きのお客樣は晴雨に不拘なるべく上草履を御持參下さいます樣、特にお願ひ申上ます。尙、靴、草履のお客樣はそのまゝ入場して頂けますので至極便利でございます

松竹株式會社 文樂座
支配人 大橋照夫
電話南㊱（三〇三二番 三七八八番 四七一一番）